

# 追悼

謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 追悼 小深田 貞雄氏 『南洋に生涯を懸けた人生』



昨年5月、天皇・皇后陛下がパラオ諸島ペリリュー島を訪問した。そこは太平洋戦争時に激戦地となり、日本将兵が玉砕した島である。終戦70周年、陛下によるこの慰霊・親善の旅は、日本人の多くが忘れかけていた

記憶を呼び起こし、不戦と平和への誓いをあらためて思い巡らせる切っ掛けとなった。

パラオという島名は、同じく5月に福島県いわき市で開催された第7回太平洋・島サミットに関するニュースでもしばしば登場した。パラオ共和国のレメンゲサウ大統領が安倍総理とこの会議の共同議長を務めたからだ。お陰で、「あの辺りは、元日本領だった」ことを多くの若い世代にも気づかせることとなった。これは真に喜ばしい。何しろ近年のパラオは、年間で人口（2万人程度）の5～6倍もの観光客が訪れる人気リゾートになったのに、かつての日本領南洋群島の中心地だった歴史を意識できる者は極めて少数派なのだから。

そこで私は、2015年を日本とミクロネシアの歴史的関係性をきちんと認識し直す「南洋回帰元年」だとした。今のところそんなことを言う者は他にいないが、しばらく時間が経てみれば、この年が特筆すべき時であったと歴史分析できる日が必ず来る、いや、そうでなければならぬと思った。それは、太平洋協会の前理事長小深田貞雄氏が逝去し、一つの時代の終焉と新たな時代の始まりをことさら感じたからでもあった。

その小深田氏とは、日本の南洋統治や開拓史を戦後世代に語り継いできた最後の人物なのである。その経歴が、同氏の南洋との深い関わりを物語っている。

1935年に京都帝国大学法学部を卒業。その翌年、南洋開発を先導する国策会社として設立された南洋拓殖株式会社（南拓）の第一期生として入社し、45年の会社閉鎖業務まで務めた。その間に、パラオ駐在勤務も経験。南拓の消滅後は、南方ゴム園開発を手がけてきた昭和ゴ

ム株式会社に入社して55歳の定年まで勤め上げた。そして、財団法人アジア会館に理事として招聘されると、ここから南洋関係活動を一気に加速させる。南拓会、日本ナウル協会、日本シンガポール協会、日本ミクロネシア協会（太平洋協会の前身）等々の設立に関わり、いずれも理事、理事長、会長などの要職に就いて、国際交流や地域と日本との歴史研究に尽力したのである。南洋一筋の仕事人生だった。自身が著した『南拓誌』『回顧／南洋に生涯を懸けて』『南洋回顧七十年』などの自伝的エッセイは、日本の南洋関係史としての貴重な資料にもなっている。

戦後の日本社会には、いわゆる「南洋通」が多数出現し、歴史の語り部として次世代に伝える重要な役割を担った人物が少なくなかった。それでも私は、あえて小深田氏について書き残しておくべきだと思ったのは、本会の初代理事長としての職責を長らく勤めたからではなく、他に幾つかの理由があったからだ。その一つは、南洋経験者の多くが将兵としての戦争体験者だったのに対し、同氏は日本の南進政策を具現化する組織から見た数少ない南洋経験者であったこと。二つには、その南洋経験を踏まえて、現在の島嶼諸国との国際交流を様々な実践するとともに、歴史研究を重ねてきたこと。三つには、自らの活動の軌跡を書物に書き残したこと。そして最後に特筆すべきなのは、そうした活動を70余年も続けたこと。これらにより小深田氏は、南洋群島時代と現在とを実践的に結び付けられる唯一無比の存在になっていたのである。彼の死で、私が「一つの時代の終焉」を感じた理由はここにある。

92歳で書いた自書のあとがきに「今も小岩の自宅から赤坂の研究所まで、毎日電車と地下鉄を乗り継いで通っている。車の送迎を使うべきだと、私の身体を心配してくれる周囲の声は大きくなる一方だが、幸いにも、私は周りの好意を無視するだけの健康に恵まれている。南方への想いも未だ健在である。」と記している。こうした日々は96歳まで続いた。2015年10月29日、満104歳の誕生日を家族とともに祝って、その5日後に穏やかに息を引き取った。まさに、南洋に生涯を懸けた人生だった。

（小林 泉）

## 前会長の谷川寛三氏逝去



昨年11月30日に、本会前会長の谷川寛三氏が逝去、95歳だった。谷川氏は、森小弁の故郷でもある高知県出身。大蔵省を経て衆参両院の議員となり、宮沢内閣では国務大臣・科学技術庁長官を務めた。政界引退後の平成13年からはアジア会館の会長となり、平成15年から24年まで9年間にわたり本会の会長を務めた。

会長時代は、来日する島嶼国首脳と積極的に交流を深め、本会の発展に

多大な貢献を果たした。谷川会長が残した国際交流を尊ぶ精神は、現在の協会活動にしっかりと継承されている。

写真は、ツバルのソポアンガ首相と交流する谷川会長

（2003年12月、アジア会館会長室於）

## ソロモン諸島の前名誉領事北野次登氏逝去



昨年12月19日に、ソロモン諸島の前名誉領事だった北野次登氏が逝去、92歳だった。北野氏（本会の北野貴裕会長の実父）が事実上創業した北野建設は、長野を本拠地として多くのスキー選手を育てるメセナ企業としても知られるが、実は、太平洋島嶼地域への貢献も極めて大きい会社だった。

1989年にソロモン諸島の首都ホニアラに建設したキタノ・メンダナホテルは、国内最高級ホテルとしてばかりでなく、遺骨収集・慰霊団の受け入れや島嶼地域への経済協力活動の拠点としての役割も果たしてきた。こうした貢献を評価された北野氏は、日本人初のソロモン諸島名誉

総領事に任命された。在京大使館を設置していないソロモンにとっては、日本で唯一の公の窓口になっている。

これまで太平洋島嶼は、経済活動の対象地として日本企業の認知度が低かった。そのため、この地に関心を寄せて実業を成功させた大手企業経営者は極めて少ない。そんな観点からすれば、北野次登氏は東急グループの会長だった故五島昇氏と共に、日本・島嶼諸国経済交流史の中で、いつまでも記憶に留めておくべき人物だと言えるだろう。